

子ども和紙大学おがわ・ひがしちちぶの実践



1 実践のねらい

平成26年にユネスコ無形文化遺産に登録された細川紙を後世に伝えるため、小川町・東秩父村が協力し、子ども大学の「よさ」と「よさ」を合わせ、両町村の子供同士の交流を図るとともに、知的好奇心を刺激する学びの機会を提供する。

2 事業計画

小川町・東秩父村の社会教育委員が中心となる実行委員会を開き、細川紙など和紙の良さを知ってもらうため、子ども大学が子供たちの経験と学びの場になるよう計画する。

月日	講義名
12 / 23 (金)	講義1「自分の手で“こうぞ”を手に入れよう!」【株式会社東秩父和紙の里】
1 / 6 (金)	講義2「“こうぞ”の皮をむくコツを知ろう」【株式会社東秩父和紙の里】
1 / 14 (土)	講義3「知ってみよう、紙すき家屋で職人の技を!」【株式会社東秩父和紙の里】

3 事業内容

(1) 実行委員組織の充実

両町村の社会教育委員及び細川紙技術者を実行委員に加え、より多くの意見を出してもらうことで、充実した組織体制とする。

(2) 講義内容の充実

ア 和紙の製造過程において、原料となる楮（こうぞ）を切り、皮をむいて、和紙を漉く一連の工程を体験するとともに、その間にクイズや講義を入れて、「知って」「感じて」といった講座にする。

イ 楮を切る際、普通の鎌とは違う桑鎌を使用するといった、普段経験ができない刃物を使う体験をさせる。

ウ 和紙を漉くには寒い時期が最適であることを理解してもらう。

(3) 町村枠を超えた子供同士の交流

違う学校の子供と接することで、学校では味わえない緊張感やリーダーシップなどを図り、交流が深められる工夫を行う。



入学式記念撮影



みんなで一斉にこうぞを切るぞ!!



こうぞの皮をこうむくんだよ!



こうぞの葉っぱは夏には何色?



和紙と洋紙はどうちがう?

4 成果と課題

(1) 成果

ア 個々の体験だけでなく、講義やクイズなどを取り入れたことにより、町村の枠を超えた学校や他校の子供たちとの交流も円滑にできた。

イ 修了式で小学生から様々な感想を聞き、今後の子ども大学の運営の参考とすることができた。

ウ 社会教育委員が中心となって運営することで、本来地域に根ざした活動を行う社会教育委員の資質向上につながることも、社会教育におけるネットワークのモデルケースとなった。

(2) 参加した子供や保護者、実行委員の感想

ア 子供（小学生）の声

「細川紙は昔、和歌山県の高野山近くの細川村という所で作られていたことを初めて知った。和紙をすく時に、けっこう力が必要で疲れたけど、昔の人の知恵が伝わった。」

「とても上手に和紙がすけてよかった。和紙についてもよく知ることができて楽しかった。」

「子ども和紙大学で和紙をすけて楽しかった。これを生かして、他の人にも細川紙を伝えていきたい。」

イ 保護者の声

「今回の経験を見て、今後、バスなどを利用して、子供たち同士で協力し合い、助け合うなどの経験ができるキャンプ等を体験させることもいいかなと思った。」

「子供たちに楮の木を植えたり、和紙で色々手作りしたりするなど、様々な体験をさせたい。」

「木工品づくりなど大工さんのような職人の技を学ばせてほしい。」

「農業に関することや地産地消への取組、観光産業の発展性などについて学ばせたい。」

ウ 実行委員の声

「紙漉き体験の他に、和紙を使った工作やちぎり絵などを講義に入れていくことも可能ではないか。」
「学びと体験や様々な交流ができ、広域化モデルとしての成果はあった。今後は、今回の反省を生かして来年度の子ども大学を実施したい。」

「小川町と東秩父村で講義内容にあった場を提供していくことで、それぞれの『地域のよさ』を生かすことができた。また、互いの負担軽減にもつなげていきたい。」

(3) 課題

ア 定員20名のところ、応募人数が少なかったため、広報の仕方を工夫していくことが課題である。校長会や教頭会で趣旨を丁寧に説明して協力を得られるような広報などをすれば良かったのではないかと考えている。

イ 参加する子供たちと実行委員の関わり方をどのように工夫していくかが課題である。あらかじめ参加する子供たちに、実行委員の社会教育委員について認識させる機会があると、より理解を深めることにつながることも期待できる。

ウ 異なる学校の子供同士の交流を十分深められるよう工夫していくことが必要である。グループワークなどを取り入れると、さらに子供同士が交流できるものと考えられる。



和紙はちぎりにくいな~



すきふねで原料をまぜよう!



修了式記念撮影